

来て来て先輩 宮津航一さん 前編

今日9日(月)は、前号でもお知らせした通り、講師に宮津航一さんを招いて「来て来て先輩」を実施しました。宮津さんには5時間目に、6年1組で道徳の授業の終末にお話をさせていただき、6時間目に講演会をしていただきました。

まずは講師の宮津航一さんの紹介をします。熊本市内の病院に17年前(2007年5月)に開設された「このとりのゆりかご」に預けられた第1号が宮津航一さんです。「このとりのゆりかご」というのは、親が何らかの事情で育てられない自分の子供を匿名で預けるために作られました。宮津航一さんは、3歳の頃「このとりのゆりかご」に預けられ、その後、宮津ファミリーホームという所で育ちます。そこは、その後、航一さんの親となられる宮津美光さんとみどりさんご夫婦がたくさんの子供たちを預かって育てられている場所です。私は宮津浩一さんと養子縁組を結ばれ、父親となられた宮津美光さんと旧知の仲で、航一さんが小さい頃、お父さんと一緒に、地域でのボランティア活動に参加しているのを見掛けたことがあります。航一さんは、今は大学生ですが、帯西校区にある帯山教会で「ふるさと元気こども食堂」の代表をされています。現在は月1回毎月第2土曜日に、「こども食堂」を開催されています。さらに、熊本の子供たちに夢と希望を持つきっかけにしたいと、「こども大学くまもと」という子供たち学びの場を立ち上げられて、そのこども大学の理事長としても活躍されています。今回は、授業の中では「感謝」の思いを今にどう生かしているかをお話ししていただきました。

5時間目の道徳の授業は、教科書の中の「おかげさまで」というお話を通して、感謝の心を考えるという授業でした。

あらすじ:祖母の口癖の「おかげさまで」に対して、主人公の「ぼく」は、疎ましく感じていた。しかし、父から「おかげさまで」についての話を聞くことで、「おかげさまで」の意味を少しずつ理解し始める。そして、祖母の「おかげさまで」という声に共感し始めるようになる。

今回の授業の「見つめる心(めあて)」は、「『おかげさまで』とはどのような心だろう」というものです。授業のはじめに、担任の城下先生が「『おかげさまで』と『ありがとう』はどう違うの?」と問い掛け、子供たちの問題意識を高めて授業に臨みました。また、教材の中の主人公が「『そうか』と言ったのは何に気付いたからなのかな?」と担任が問うと、子供たちは、「『おかげさま』という言葉一つで、多くの人に感謝の思いを伝えられる。」「感謝をするだけではなく、行動に移さなければ伝わらない。」と自分の考えを出し合いました。授業の終盤で、自分のこれからを考える場面では、「支えられてきたから、自分も支えていきたい。」など自分を見つめながら、それぞれが自分の「これから」についての意見を真剣に述べていました。

最後は、講師の宮津さんから「小学生だからとか、年齢とか関係なく、今日の授業で勉強した、自分なりの『おかげさま』を誰かに返して、広めて欲しいと思います。」という話があると子供たちは真剣に聴きっていました。

今回の授業は6年部でも共通実践を行い、6年生全員の心が育ちました。6年1組の皆さん、宮津航一さん、貴重な道徳の授業を共有させていただき、ありがとうございました。

